明治中期における房総丘陵の植生景観

小 椋 純 一*

Vegetation of the Hills of the Boso Peninsula in the Middle Meiji Era

Junichi OGURA

摘要：古い時代の植生景観については不明な部分が少なくないが、明治時代になると本格的な地形図や詳しい地理的記録など、かつての植生景観を考える上での良い資料が多く残されるようになる。本研究は、今から百年余り前の明治中期に測図された迅速図の植生に関する不明部分やその精度などを、その原図やそれと同時に作成された偵察録などをもとに考察することを中心にして、その頃の房総丘陵の植生景観を明らかにしようとしたものである。その結果、その地の当時の植生景観は、森林とともに草地的なものの割合が大きく、また、森林は松林や櫟類などからなる低林が多く、高木の大面積の森林の大部分は官林であったなど、今日とは大きく異なるものであった。

1. はじめに

明治13年3月、参謀本部測量課は関東一円にわたる2万分の1地形図の測量に着手し、同19年8月にそれを完了した¹⁾。当初、「第一軍管地方2万分1迅速測図」と称されたその地図群は、今日では一般に迅速測図、あるいは迅速図と呼ばれている（本稿では以後、迅速図とする）。それは、関西の仮製地形図などに先立ち、広範な地域を近代的測量方法によって測図した日本で最初の地形図である。その測図記号数は、約140種²⁾と仮製地形図などに比べると少ないものの、それによって、明治中期における植生を含むさまざまな地理的状况を詳しく知ることができる。

ただ、それは、植生の状況をさらに詳しく知ることができる仮製地形図³⁾に比べると、植生に関する記号数が少ないこと、また、「横叢地」や「牧場或草地」などの記号のように、その記号の意味が、十分明らかでないものもあるため、それだけではかつての植生景観の実態をとらえにくい面もある。

しかし、この迅速図には、その原図（本稿では以後、原図とする）が今日まで残されている⁴⁾。迅速図の一つの図幅の1/4から1/16を一枚の紙に測図したその原図は、ドイツ式の色線号式図式による迅速図とは異なり、「フランス式」とも「渲彩図式」とも呼ばれる「明治13年式図式」によるカラフルなものであり、一見して植生の状態が見やすいものとなっている。さらに、それは、迅速図の「雑樹林」の記号の部分に、具体的な樹種名が記されているため、迅速図よりも詳しい植生の状態を読みとることができる。また、原図には、他の隣接する図と重複して測図された接合部が、ふつう上下左右にそれ

ぞれ5mmずつあり、それによって図の精度などを知ることができる。

また、地形図を補完するために、「偵察録」⁵⁾が原図の測図と同時に作成され、それによっても迅速図中の明らかなでない記号の意味や、かつての人と自然とのかわりなどを考えることができる。

ここでは、それらを主要な資料として、明治中期における房総丘陵の植生景観を考えてみたい。

図-1 対象区域

*京都精華大学人文学部人文学科

2. 対象区域

ここで対象とする区域は、図-1の1から35の番号で示した縦長の方形の集合部分のうちの丘陵山地部分である。その大部分は、一般に房総丘陵と呼ばれているところである。図-1中の小さな方形の一つ一つは、迅速図の一枚ごとの図幅の測図範囲であり、そこには丘陵山地がある程度は含まれている。以下では、これらの部分を《》記号によって表す。たとえば、《1》は、対象区域のNo.1の部分を示す。

この区域の南部には、標高300m程度から400m程度の山々もあり、また、一部には急峻な地形の部分もあるとはいえ、房総丘陵は全般に標高が低く、かつなだらかなところの多い丘陵山地である。

なお、半島南部の一部については、陸地の面積が比較的小さいことや、その部分の独自の「偵察録」が作成されていないことから、ここでは対象区域から除外した。

3. 迅速図記号の概念の検討

迅速図の記号には意味が十分明らかなでないものもあるとはいえ、その図上から、明治中期の植生景観について、多くの情報を得ることができる。たとえば、房総丘陵には、森林が丘陵山地の2/3程度にも満たない部分が少なくなかったこと、その森林の樹種としては松が特に多かったこと、森林以外の植生としては、「牧場或草地」の割合が多いところが多く、「樺叢」や「灌木地」の多いところも一部にあったこと、また、丘陵山地に占める「畑」の割合は、全体的にはさほど大きくはないが、房総半島の丘陵山地にはどこでもしばしば見ることであったものであったことなどである。

しかし、迅速図と原図には、「樺叢」をはじめ、記号の概念が必ずしも明確でないものがいくつかある(図-2)。ここでは房総丘陵のかつての植生景観をより明らかなものとするために、それらの記号の概念を「偵察録」や『兵要測量軌典』⁶⁾などをもとに考えてみたい。

牧場或草地	樺叢	灌木地
荒蕪地	雑樹林	松林

図-2 迅速図記号の例

(1)「牧場或草地」

先にも述べたように、明治中期の房総丘陵には、「牧場或草地」が広く見られたが、それはどのような植生だったのだろうか。関西の仮製地形図では、「草地」の記号

は芝地のように、かなりよく管理された特別な草地と考えられる⁷⁾が、「牧場或草地」が極めて広く見られる迅速図の場合はどうなのだろうか。

このことを、まず、「偵察録」の記述から考えてみたい。次に示したのは、対象区域中で「牧場或草地」の割合が大きい地域についての「偵察録」の記載のうち、「牧場或草地」の部分について述べている箇所の一部である。なお、引用文中の俗字や略字の類は正字に改めたが、字の間違いについてはそのままとした。また、引用文の最後に《》記号を付すことにより、それが対象区域のどの部分についての「偵察録」の記述であるかを示した(以下同様)。

「此地方岡阜地平坦地ト殆ント相半ス…(中略)…武士村後方ノ岡阜ハ能満原ニ續キ雜草繁茂スルノミニテ平坦開豁通行自在ナリ」《12》

「能満原ハ極メテ廣ク満野皆草地ニシテ唯稀ニ小松林ノアルノミ故ニ遠ク之ヲ望メハ平坦渺漠トシテ涯ナク宛モ草海ヲ見ルカ如シ」《12》

「地勢一般ニ山地ニシテ峯巒蟠桓シ林木疎ニシテ黄茅満ツ」《14》

「此地裸山禿峯茨繁茂シテ樹林極メテ鮮ナシ」《14》

上記の後の2つの引用文と同様な内容は、《15》《16》の「牧場或草地」についての「偵察録」の記述にも見ることができる。なお、最後の引用文中の裸山、あるいは禿峯は、文脈等からすると、ここでは全く草木のない裸地を意味するものではないものと考えられる。

また、迅速図の《22》の部分で「牧場或草地」となっている富士山という名の独立丘について、「偵察録」では、「満岡樹木ナク唯篠茅ヲ生セリ」と記されている。

これらの記述から考えると、迅速図の「牧場或草地」の記号は、牧場とともに、その他の雑草地、あるいは篠や茨なども含むことのある茅原などの草地も意味し、仮製地形図の「草地」のように、特別な草地を意味していないことがわかる。

一方、そのことは、原図では、迅速図で「牧場或草地」となっているところに、牧、草、茅、萱、芝の字が使い分けられていることとも矛盾しない。なお、原図では、「牧場或草地」の状態を一般により細かく知ることができるものと考えられるが、《16》の部分などの原図の接合部では、一方では草となっているものが、一方では茅となっている例がいくつも見られることから、原図の「草」は、必ずしも牧場や茅原や芝地以外の草地だけではなく、茅原などをも含んだ表現である場合もあることが考えられる。

(2)「樺叢」

迅速図と原図において、「樺叢」の記号は、特にその概念をはっきりとしないものである。

迅速図の測量の基になった『兵要測量軌典』では、

「樹、小樹、稚樹、模叢ヲ以テ蔽フ所ノ土地ヲ總稱シテ森林ト云フ而シテ其廣狹ニ從ヒ籬笆、小叢、果園、小林或ハ大林ト云フ」とあり、その記述から考えると、「模叢」は森林の一種として考えられたものであることがわかる。

しかし、模叢という言葉は、今日の国語の辞書には出てこないものであり、また、古語としてもなかなか見つけることのできない特殊な言葉である。筆者は唯一、『大漢和辞典』の中にその言葉を見つけることができたが、そこには、模叢「ボクソウ」とは、「小さな棘木のむらがり」⁹⁾とある。ところが、「模」には「(密生する) 小木」⁹⁾などの意味、また「叢」には「くさむら」とか「灌木のしげみ」¹⁰⁾などの意味はあっても「棘木」というような意味は見当たらないことから、迅速図において、「模叢」がそのような意味として認識されていたかどうかは疑わしい。

一方、迅速図の記号の表現からは、「模叢」は、「牧場或草地」と「灌木地」が合わさったような状態を意味しているように見える(図-2)。また、『兵要測量軌典』では、その第3篇製図の項において、「模叢地ハ木緑ト草緑トヲ以テ交番且班形ニ渲彩シ模ノ字ヲ記ス」と記され、一方、「森林ハ木緑(黄ニ微量ノ藍ヲ和ス)ヲ以テ渲彩シ松、杉、竹等ノ字ヲ帰ス○草地及牧場ハ草緑(藍ニ微量ノ黄ヲ和ス)ヲ以テ渲彩シ草又ハ牧ノ字ヲ記スヘシ」とされていることから考えると、「模叢」は「牧場或草地」と何らかの「森林」の組合わさったものである可能性が大きいようにも思われる。

ただ、いずれにせよ、迅速図中の「模叢」の概念は、決して明らかではないため、「偵察録」の記載は、その意味を考える上で重要と考えられる。対象区域における「偵察録」の記述のうち、「模叢」の概念を考えることのできるものとしては、たとえば、次のようなものがある。

「山面ハ樹林ヲ為シ或ハ模叢或ハ草生地ヨリ成ル之ヲ概スルニ西南部ハ模叢及草生地ニシテ展望ヲ遮ル者少ク…」《9》

「図ノ西南隅ニ筒森官林アリ樅樹繁茂シ人跡ノ至ル稀ナリ他ハ草生地又ハ模叢地ニシテ間々小樹林アルノミ」《10》

「草地模叢地ナルモノハ殆ント不毛地ト云可キモノニシテ山頂ヨリ山頂ヲ越テ尚数百ノ溪谷ヲ展望ス可シ…」《11》

「草地模叢山ハ早春年々焼悉シ肥灰トナシ来年茅草ノ成長ヲ助ク故ニ荊棘ノ類ナクシテ自在ニ跋涉シス可シ」《11》

「養老川南北ニ亘リ兩岸ノ傾斜急峻ニシテ且ツ縁岸密ナル模叢アリ大ニ展望ヲ遮リ以テ此地ヲ分断セリ」《13》

以上の引用文のうち、最後のものを除けば、「模叢」の地は、展望を遮るものがないか、たとえそれがあった

としても、それは点々とした小樹林のようなものであり、また、毎年山焼きが行われるために茂類がなく跋涉しやすかったことがわかる。そして、先に触れた迅速図の記号の表現や、『兵要測量軌典』の記述も含めて考えれば、「模叢」とは、草地の間に点々と小木や小樹林のある植生ということになる。

ただ、最後の引用文からは、「模叢」とは、それが密であれば、展望が遮られるような植生ということになり、他の引用文などから考えられる「模叢」の意味と異なってくる。しかし、そのことが記されている《13》の部分の迅速図上には、問題の養老川沿岸を含め、「模叢」の記号は見られないのに対し、他の引用文が記されたところでは、実際に迅速図上に「模叢」の記号を広く見ることができることからも、その引用文の「模叢」の概念は決して一般的ではないもののように思われる。

(3)「灌木地」

灌木についてはその意味が明かなようにも思われるが、国語辞典にその高さについての記載を見てみると、「ほぼ人間の背丈以下のもの」(広辞苑)や、「2〜3メートル以内のもの」(日本国語大辞典)などがあり、決して十分はっきりとしたものではないことがわかる。「灌木地」は、迅速図中の対象区域にはさほど多くはないが、こうしたことから、その概念についても少し考えておきたい。

「偵察録」には、迅速図で「灌木地」として示してある部分について、次のように述べている箇所がある。

「高地ハ傾斜急ナル無数ノ斜面ヨリ成リ之ヲ掩フニ樹林ヲ以テス而シテ高地ノ大部矮短ノ樹ヲ以テ成リ且ツ高低極リ無キヲ以テ展望ヲ害スルコトナシ」《4》

「灌木地ノ部アリ其部ハ山頂ノ高低一ナラサルヲ以テ展望自由ナリ森林ノ部ハ則チ然ラサルナリ」《4》《9》

これらの記述からすると、「灌木地」とは、展望を害することのない矮小な樹木で覆われた場所と考えることができる。このことは、《3》や《7》の部分の灌木地に関する「偵察録」の記述内容とも矛盾しない。

一方、「偵察録」の中には、森林の内部について、「茅又ハ灌木アリテ展望ヲ遮キル」《1》《2》《5》との記述も複数見られ、その記述からは、灌木は展望を遮るほどの高さの樹木と解釈することができる。しかし、それらはすべて、歩兵中尉依田正忠によって記されたものであること、また、それらは森林内の「灌木」について述べられたものであり、「灌木地」について述べられたものではないことから、それによって迅速図の「灌木地」の一般的な意味を考えることはできないように思われる。

(4) 森林

かつての房総丘陵には、森林以外の植生景観も広く見られたとはいえ、森林の占める割合が最も大きかった。

迅速図において、一般の森林とは、どのような概念としてとらえられていたのだろうか。『兵要測量軌典』では上記のように、「樸叢」が森林の一種としてとらえられていたようなことを考えれば、そのことについても検討しておく必要があるように思われる。

ここでは、特に森林の樹高について考えておきたい。それを知る手掛かりとしては、前述の「灌木地」についての考察で引用した「偵察録」の一文がある。それによると、灌木地では展望が自由なのに対して、森林ではそうではないことから、森林の樹高は、人間の目の高さ以上のものとしてとらえられていた可能性が考えられる。

また、《20》の部分のうち、迅速図中「雑樹林」の記号が広く見られる大阪村浅間山の後山について、「偵察録」には、「概ネ大樹疎ニシテ之ヲ遠望スレハ恰モ草山ノ如クニシテ登降自在ナルニ似タリト雖トモ決シテ然ラズニ米乃至四米ノ雑樹繁殖シ通行最モ困難……(以下略)」と記されている。このことから、少なくとも2m以上の木々の集まりは森林としてとらえられたことが考えられる。

また、以上のこととともに、迅速図が軍用地図であること、また、それを補完する目的で作られた「偵察録」に、しばしば展望がきくか否かの記述が見られることを考えれば、灌木と森林の区別は、人間の目の高さ、すなわち1.5m程度の高さでなされた可能性が大きいように思われる。

(5)「荒蕪地」

対象区域中、迅速図に「荒蕪地」の記号で記されたところがわずかしかないため、その概念を「偵察録」から知ることは難しいが、『兵要測量軌典』の製図に関する次の記載はある程度参考になる。なお、迅速図の「荒蕪地」には、原図で荒(荒地)、曠(曠野)として記されているところを含んでいる。

「荒地ハ鐵緑ト沙色(洋紅ニ黄ヲ和ス)ヲ交番且班形ニ渲彩シ荒ノ字ヲ記スヘシ…(中略)…曠野ハ鉛筆ノ輕キ一線ニテ境界セル若干白部ヲ殘シ此白部外ヲ淡キ黒色ヲ和スル灌木地ノ顔料ヲ以テ渲彩シ而シテ其内部ヲ地類ニ應シ沙色、藍色、樸叢地等ノ顔料ヲ以テ渲彩スヘシ…(中略)…沙地ハ沙色ニテ渲彩シ沙ノ字ヲ記スヘシ…(中略)…沙礫地ハ沙色ニテ渲彩シ烏賊墨ノ小點ヲ散布シテ之ヲ示ス」

この記述からは、不明な点もあるものの、「荒蕪地」は必ずしも一様な景観ではないこと、また、そこには、何らかの植生とともに、砂地や砂礫地が少なからず存在する場合が少なくないことが考えられる。また、迅速図のその記号の表現(図-2)から考えると、その何らかの植生とは、主に草本であることが考えられる。

4. 迅速図の植生記載の精度

迅速図の植生に関する記号の概念は、以上のようにかなり明らかになったように思われるが、それでは、迅速図の植生に関する精度はどの程度のものなのだろうか。

「偵察録」の記載の中には、そのことを考える上で重要なものがある。たとえば、迅速図では、一般の森林を、「松林」、「杉林」、「檜林」、「雑樹林」に分け、原図では、さらに数多くの樹種名をあげて、それぞれの場所の森林の状態を示しているが、「偵察録」の次の引用文のように、その中には、ある部分の森林をどの樹種で代表させるかを決めるのに苦労した場合も少なくなかったようである。

「丘阜ハ概ネ樹林ヨリ成ル然レトモ大樹林整然タル者ナシ各種ノ樹木各所ニ散在シ殆ント命名ニ困シム故ニ図上ニ註記スルニハ其中ニ就テ首ナル樹木ノ名ヲ書ス假令ハ図上ニ就テ考ルトキハ全面松樹ヲ以テ成ル者ノ如シト雖トモ實際ニ至テハ松杉檜椎等ノ雑樹ナルヲ以テ林間ヲ通行ス可キニハ偏ニ路上ニ由ラサルヲ得ス」《8》

この引用文にあるようなことは、特に多くの樹種名の表記のある原図では多かったことが想像される。そして、そのことは、迅速図で、さまざまな樹種に代表される森林が、「雑樹林」としてまとめられることになった大きな理由であることも考えられる。

また、「偵察録」の記述が、迅速図および原図の記載とよく一致しない部分がある。たとえば、「偵察録」には、次のような一文がある。

「上野村星ヶ畑村等ノ如ク西北ニ至ルニ從ヒ山益高ク且峻峻ニシテ全ク通行スル能サル所多シ山ハ皆樹木ヲ以テ覆フ然レトモ松樹ハ甚ク粗少ナリ故ニ遠ク之ヲ望メハ宛モ疎林ノ如ク或ハ枯落ノ如シト雖トモ近ク之ヲ見ルトキハ榛莽篠茅滿山ニ繁茂シテ身ヲ埋メ展望ヲ妨ケ殆ント通行ス可ラス」《22》

この記述からすると、その付近は、迅速図では「雑樹林」とされるべきところと思われるが、迅速図および原図ともに、そのあたりには、「雑樹林」はごく一部にしかなく、大部分は「松林」となっている。ただ、これについては、きわめてまばらな松の疎林であっても、迅速図ではそれが「松林」とされた可能性も考えられる。

あるいは、「偵察録」では、「樸叢繁茂」《27》とある柱木牧場が、原図では「樸叢」となっているのに対して、迅速図では「牧場或草地」になっているが、それは、迅速図の記載の誤りと考えられる。

一方、隣合う原図の接合部の記載の矛盾を見ることにより、迅速図の植生の記載に関する精度を考えることができる。そうした、原図の接合部の比較では、概して、矛盾が少ないことがわかるが、一部には、一方の原図では茅となっている部分が、他方では檜となっている例《15》や、一方では草、萱となっている部分が、他方では松となっている例《22》と《27》の境界部)もある。

そして、それらの場合、その記載の矛盾する接合部分だけでも10ha前後の広さがある。なお、先に述べたように、一方の原図では草とあるのが、他方では茅や牧などとなっているところも何箇所かあるが、それについては原図における草の概念が、茅野や牧場などを含んでいたためとも考えられる。

以上のことから、迅速図の植生の記載は、概して信頼はできるものの、部分的には記載の誤りなどにより、ここで対象としている房総丘陵だけを見ても、少なくとも10ha程度の記載に問題のあるところが、最低何箇所かはあることが考えられる。

5. 「偵察録」に見る植生景観とその背景

迅速図を補完する目的で作成されている「偵察録」からは、迅速図の記号の概念やその精度を考えることができるのみならず、かつての植生景観やその背景を詳しく知ることができる。

明治中期の房総丘陵の植生景観のうち、森林の状況については、迅速図のみからは読み取りにくい面があるが、「偵察録」を見ることにより、当時そこには鬱蒼とした豊かな森林は少なかったことなどがわかる。

たとえば、「此ノ地山脈ノ多キニ反シテ森林極メテ鮮ナシ」《18》というように、森林が少ないことを述べているもの《6》《14》《15》《16》、「大樹林ナシ」などと記され、大樹林がなかったか、あったとしても極めて少なかったことを示す記述があるもの《2》《12》《17》《19》《22》《23》《30》《31》《33》、あるいは、「大林ナシ」などと記され、大きな面積の森林がなかったことを示す記述が見られるもの《1》《6》《7》《12》《23》《24》が少なくない。

また、「小許ノ森林アリト雖トモ用材ニ適スルモノ更ニナシ故ニ他方ヨリ悉皆輸入セサルヲ得ス」《6》、あるいは、「中郷村其他連合三ヶ村ハ上地官林ノ外建築ニ供用スヘキ程ノ財木殆ント無シト云フモ可ナリ…(中略)…豊岡村御代原村ハ松縦ノ類ヲ出スト雖トモ土地ノ用ニ供スルニ過キス雜木炭ヲ製スルニ適スル者ハ不少…(中略)…植畑村他連合三ヶ村ハ建築材ナシ」《25》といったように、用材不足について述べているもの《1》《2》《7》《17》《23》《24》《29》も少なくない。

一方、「竹木ハ其地ニ産ス然レトモ其土地ニ使用スルモノノミ」《4》といった内容のものも含め、木材が自給されていることを記しているところもあるが、その数は決して多くはない。

こうして、明治中期の房総丘陵には、迅速図で一見する以上に、よい森林のないところが多かったことは明らかである。「偵察録」では、その背景として、「土民ノ耕作ニ銳意ニシテ森林ノ利ヲ顧ミサルニ因ルナリ」《18》といった見方をしている記述《14》《15》《16》もいく

つか見られ、また、海岸部では、「樹木ハ潮風ノ為メ生長甚ダ遅キ…」《6》として、自然的要因をあげているところもある。

しかし、「偵察録」には、森林が薪炭の供給源とされていたことを知る記述が多く、また、「森林ハ凡テ私林ニシテ松杉檜櫟ヲ生ス但シ杉樹甚タ少ク松樹ハ大凡二十年内外に於テ伐採シテ薪炭トナシ東京横濱等ニ輸出販賣スル故ニ大樹甚タ少シ林中ハ大概榛莽篠茅茂生シテ殆ント通行ス可ラサル者多シ」《31》、あるいは、「山間炭ヲ輸出ス其額甚タ大ナリ」《15》といった記述から、房総丘陵の薪炭が大量に東京などに供給されていたことがわかる。そして、かつてよい森林が少なかったことの根本には、森林の過度の利用があったことが考えられる。

なお、その森林の伐期としては、30年から50年と記されているものも一部にはあるが、20年前後から30年の伐期とするのが多い。ただ、その林内について、「榛莽篠茅茂生」《15》、あるいは、「灌木及ヒ茅等繁茂」《2》といった記述が多く見られることから考えると、森林は完全に密閉したものは少なく、林内に太陽光が直接よく入るようなものであった可能性が大きいように思われる。それは、原図の図郭外に描かれた視図に、しばしばそのような林を見ることができるところからも考えられることである。

一方、「私林ハ概ネ繁茂セル稚樹林ニシテ其廣袤甚タ長大ナリ林中ニ生スル樹種ハ檜櫟竹ニシテ麻竹ヲ混シ松杉等ノ大樹少ナシ而シテ此林ハ首トシテ根株ヲ培養シ之ヨリ蕃生スル枝葉モ凡ソ十年ニ至ラザレバ伐採セズ」《13》との記述からもわかるように、大きな木のほとんどない萌芽更新による低林が広くあった部分があることがわかる。その伐期は、必ずしも明らかなではないが、迅速図で「雑樹林」として示してある大森村の西北隅の官林が、「每十五年ノ斬伐林¹¹⁾」《11》と記されていることなどから考えると、15年前後である場合が多かったことが考えられる。また、先述のことなども含めて考えれば、そのような低林はあちこちに広く見られ、それは迅速図で「雑樹林」として記された部分のかかなりの割合を占めていたものと思われる。また、原図と迅速図の比較から、「雑樹林」の主な樹種が檜や櫟や樅であることから、そうした低林にはそれらの樹種が多かったものと思われる。また、このような低林は、「斬伐林…(中略)…一切掃除セサル」《19》の記述から見ても、林内の手入れがない場合が多かったことが考えられる。こうしたことから、このような低林は、平均的には伐採後7～8年で、樹高はおそらくせいぜい3m程度のものであったものと思われる。

以上のように、「偵察録」から、決して豊かとは言えないかつての房総丘陵の森林景観を広く見ることができると、その一部には、「間々大樹林アリ」などとして、

大樹林の存在について触れている箇所《5》《20》《21》《25》もある。大樹林に関する、次のような「偵察録」の記載を見れば、そのようなよい森林は、主に官林であったものと考えられる。

「官林最多ク私林ノ少ナキ殆ント十中ノ一二ニ過キス其廣サハ該地ノ過半ニシテ千有餘町ニ至ル林中ニハ諸樹アリト雖トモ就中樞最多松之ニ亜キ檜杉又之ニ次ク森林中ニハ大樹林ト云ヘキモノ甚タ多ク實ニ其幾百年ヲ経過セシヤヲ知ルニ由ナキモノアリ」《20》

「鹿野山官林中杉アリ凡二十万本其周囲ハ一米突ヨリ四米突ニ至ル但其最モ大ナル者ハ四万五六千ニ及フ」《25》

「森林ハ凡テ私林ニシテ大樹ナシ」《23》《29》

また、「偵察録」中の「大樹アルハ社寺ノ境内等ニシテ又面積ハ最少ナシ」《17》などの記述から、大木は社寺の境内では珍しくはなかったことがわかる。

ところで、房総丘陵のかつての松林には、次の一文のように、植栽によるものがあつたようである。

「畑沢村子安村近傍ノ如キハ岡阜ノ地多キヲ以テ一般松樹ヲ植附殆ト二十年ヲ経ルニ至レハ薪トシテ産出スル者ナリ又松樹培養法ノ如キハ最前畑地ニ種ヲ下シ兩三年ヲ経ルニ至レハ更ニ畑地ニ植直シ尚三四年ヲ経テ丘陵岡阜ノ地ニ植ユル者ナリ故ニ成木ニ至ルモ皆整列セリ」《30》

このように、松を植栽によって育てていたことを示す記述は、他にもいくつも見られる《3》《7》《12》《17》《18》ことから、そうしたことは、特に東京に近く森林への圧力がより大きかったことが想像される房総丘陵の北西部などでは、かなり一般的であつたものと考えられる。

以上は、森林について考えたものであるが、明治中期の房総丘陵では、「牧場や草地」や「樸叢」といった森林以外の草地的植生景観が広く見られたことは、先述のとおりである。房総丘陵のように雨量が多く温暖な地において、そうした植生景観が広く見られた背景には、先に迅速図の「樸叢」の記号の概念の考察で引用した一文などから考えると、定期的な火入れや放牧などの人為的圧力があつた可能性が大きいものと思われる。

なお、迅速図にしばしば見られる房総丘陵の農地については、「偵察地ハ平地ノ面積甚タ狭シ故ニ山頂ニ至ルマデ鋤鋤ヘ…」《6》といったような記述を、「偵察録」中にいくつか見ることができる。

6. むすび

房総丘陵は、近年、その北部を中心に、ゴルフ場や宅地などに変わってしまっているところも少なくないものの、全体的には、コナラやクヌギなどを中心とした天然林やスギやヒノキの人工林などからなる比較的豊かな森林で覆われている部分が多い¹²⁾。

しかし、以上で見てきたように、明治中期の房総丘陵には、草地などの森林以外の植生景観が広く見られた。また、当時のその地の森林は、松林や低林が多く、大木からなるうっそうとした広い面積のものは、一部の官林などに限られていた。そうした今日とは大きく異なるかつての房総丘陵の植生景観の背景には、薪炭などの生産のための森林の過度の利用や、毎年繰り返される山野への火入れなど、人間による大きな圧力があつたことが考えられる。

最後に、本研究をまとめるにあたり、大森八四郎氏（日本地図センター相談役）、建設省国土地理院、師橋辰夫氏（日本地図資料協会会長）には、貴重な資料の閲覧などに関し、たいへんお世話になった。ここに記して深く謝意を表する次第である。

（註）

- 1) 測量・地図百年史編集委員会編（1970）：『測量・地図百年史』、建設省国土地理院。
- 2) 前掲1)
- 3) 小椋純一（1992）：明治中期における京阪神地方の里山の景観、京都精華大学紀要3、157-181。
- 4) 建設省国土地理院蔵のこの原図は、『明治前記手書彩色關東實測図』として財団法人日本地図センターにより1991年に復刻発行されている。
- 5) 建設省国土地理院蔵。
- 6) 陸軍文庫（1881）：『兵要測量軌典』、陸軍文庫。
- 7) 前掲3)
- 8) 諸橋轍次（1957）：『大漢和辞典巻六』、大修館書店。
- 9) 前掲8)
- 10) 諸橋轍次（1956）：『大漢和辞典巻二』、大修館書店。
- 11) 『兵要測量軌典』では、斬伐林を、「樹株ヨリ發生スル嫩樹ヨリ成木シ時々斬伐スル者」としている。
- 12) 国土地理院発行の土地利用図などによる。

Summary : The vegetation of the hills of the Boso Peninsula in the middle Meiji era was studied mainly through the maps surveyed in 1880's and the reconnaissance notes to support the maps. Questions are that there are some unclear marks on vegetation in them and that how accurate they are and so on. The notes and the drafts of the maps are very helpful to study the questions. The results show that the vegetation there more than a century ago was greatly different from today: there were wide areas of grass land along with pine forests and low forests mainly consisting of Quercus species, and large high forests were usually seen only in the government-owned places.